資料　7-2



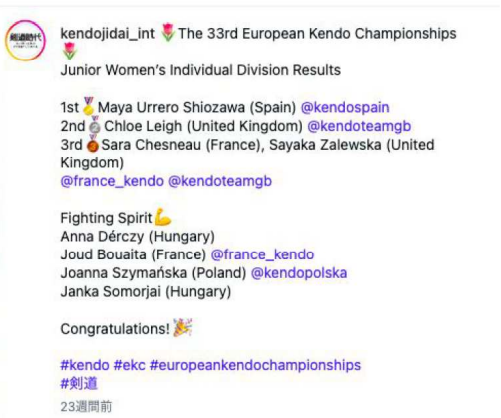
# 海外剣士が剣道に感じる魅力と
# スポーツハラスメントの原因と対策

2025.12.15



## ヨーロッパ剣道について

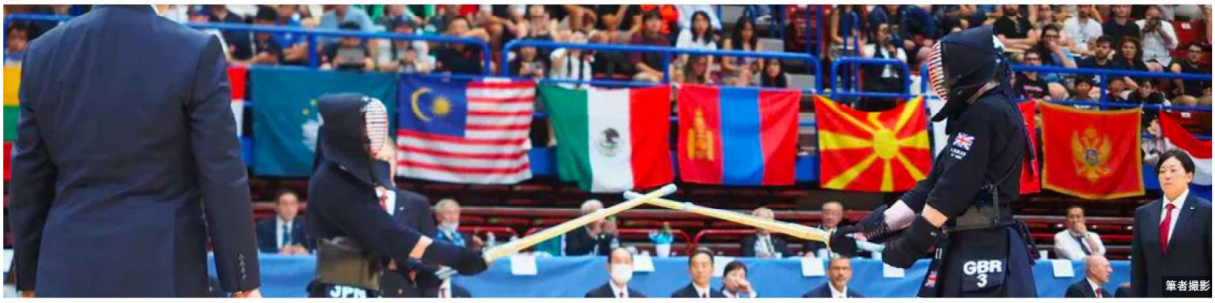
有段者の数は**約2万人**。2025年の欧州剣道選手権大会はオランダのライデンで開催。39カ国が参加し、**女子ジュニア個人の部** が新設された。「家族が剣道をしているから自分も始めた」という子どもも増え、盛り上がりを見せている。



# 海外剣士が剣道に感じる魅力



PRESIDENT Online　人気記事 | ビジネス | マネー | 政治・経済 | キャリア | ライフ | 社会 | 会員限定 | 検索　ログイン　会員登録




#スポーツ　#武道　2024/08/05 9:00

## 武士道に魅せられる「外国人剣士」が増加中…29カ国102人に聞いた「剣道が愛される3つの理由」

30代オランダ人「息子に忍耐力と意志の強さを見せたい」

PRESIDENT Online

佐藤 まり子　+フォロー
ライター

1 2 3 4 5 次ページ

剣道の世界一を決める大会が3年に1度のペースで行われている。1970年の第1回大会では17カ国だった出場国が、今年の第19回大会では61カ国に増え、海外で人気が広がっている。なぜ外国人は剣道に魅入られるのか。ライターの佐藤まり子さんが取材した――。

**2024年の世界剣道選手権大会に参加した選手 102名にアンケートを実施。**
**プレジデントオンラインに記事を執筆。**

https://president.jp/articles/-/84413

### 剣道を続ける理由・魅力 第3位：競技としての魅力、生涯剣道

剣道は「武道」だが、同時にスポーツとしての側面も多分に持つ。試合に出場する若い世代を中心に「競技としての魅力」、そして「生涯剣道」の特性が多く挙げられた。

> 剣道の特別な特徴は、どんな歳でも続けられることだと思います。他のスポーツだと、いつか引退するのと反対に、剣道の先生方が年々強くなっていくのはとてもかっこいいです。（ドイツ、20代、初段）
>
> 歳をとってもできること、礼儀作法が身につくこと、性別や体格で向き不向きが決まらないこと、精神力が鍛えられること、怪我が少ないこと、そしてなにより世界中の色々な人に出会えて、友達がたくさんできることです。（オーストリア、10代、二段）
>
> 年を重ねましたが、今の自分の剣道が一番だと思います。もしかしたら動きは遅いかもしれませんが、それでも今のほうが上達しています。（オランダ、40代、六段）
>
> 剣道を始める前は、オリンピック競技のフェンシングをしていました。剣道は似ている部分もありながら、違う点もあって面白いと感じます。（イスラエル、20代、初段）
>
> 剣道は私の人生、私自身の一部です。毎回稽古に参加するのが楽しいし、前回よりも良くなろうと努力しています。（アイルランド、40代、四段）



### 剣道を続ける理由・魅力 第2位：国境を越えた友達、コミュニティ

日本にはない、海外剣道独自の特徴として「国際交流」が挙げられる。試合回数も、高段者から学ぶ機会も、海外は日本と比較して格段に少ない。そのため、大陸間の移動が盛んだ。

どこかの国で日本の八段の先生のセミナーが開催される場合は、周辺国から剣士たちが集まる。また、各国主催の試合にも海外剣士たちは熱心に参加する。出稽古も盛んだ。

筆者撮影

## 「世界のどこでもいつでも温かく迎えてもらえる」

剣道のコミュニティが大好きです。世界のどこにいても、いつでも温かく迎えてもらえる。素晴らしいです。（オーストリア、20代）

自分の殻を破り、新しい友人を作り、世界中を旅し、上達していける点。（リトアニア、10代）

高校時代、日本に留学した時に部活で剣道を始めました。仲間と剣道するのが楽しいから続けています。（ドイツ、20代、初段）

筆者は5年ほどオランダに在住し、ヨーロッパ剣道に関わってきたが、ヨーロッパ最大の試合「欧州剣道選手権大会」には約40カ国が参加。そのほとんどが英語を話し、試合が終わると、お互い挨拶し握手やハグを交わす。

あるベルギー剣士の話によると、数十年前まではこんなに英語を話し交流する光景はなかったそうだ。ソーシャルメディアの発達などにより、人々がつながり、交流が深まっていったという。



### 剣道を続ける理由・魅力 第1位：自己鍛錬・成長のため

剣道を続ける理由として最も多かったのが「自己鍛錬・成長のため」だった。10代や20代など、若い世代からもこの回答は多く寄せられた。

自分の魂にとって重要だと感じます。精神面を深めることができる。（イタリア、20代、二段）

剣道が私を身体的にも精神的にも強化し、挑戦させてくれる点が好きです。友人たちと一緒に稽古をすることも本当に楽しんでいます。（オーストリア、10代）

私はいくつになっても、剣道の稽古をやめることはないと思います。これが私が剣道を愛する理由です。どれだけ達成しても、常に学ぶことがあります。剣道を通じて世界を広く見ることができ、多くの友人を作り、さまざまな先生から学ぶことができました。（フィリピン、40代、三段）

剣道は絶え間ない挑戦。私にとってかけがえのないものです。剣道を通して息子に忍耐力と意志の強さを見本として見せたいと思います。（オランダ、30代、四段）

身体的にも精神的にも成長するためです。剣道での学びを私生活に簡単に活かすことができます。例えば、ストレスや困難な状況でも冷静で落ち着いた心を保つことが挙げられます。（アイルランド、40代、初段）

## 日本人が海外の剣道から学べること

オランダ人からの回答で「剣道を通して息子に忍耐力と意志の強さを見本として見せたいと思います」とあったのが印象的だった。オランダ人は、どちらかというと自由な発想や子どもの意志の尊重に比重を置いているように感じる。誰かに強制された「我慢」ではなく、自分自身のために「耐え忍ぶこと」「精神面を鍛えること」は、他国から見ても価値があるものなのではないだろうか。

毎年2月に、フランスで大きな剣道大会がある。フランスの周辺国だけではなく、日本の大学生も参加する。その大会に参加した学生が「卒業したらもう剣道をやめようと思ったが、海外剣士の純粋な心や剣道を楽しむ姿を見て、もう一度剣道に向き合ってみようと思った」と語った。その学生はずっと強豪校で剣道を続けてきた選手だった。

今回のアンケートの回答結果を読むと、剣道への愛情やコミュニティへの強い帰属意識、そして自己鍛錬や自己向上への真摯な姿勢が見てとれた。なぜ武道を学ぶのか？なぜ、剣道をするのか？　その問いに、海外剣士たちは真剣に向き合っているように感じる。



# ウクライナの事例

**ヨーロッパの人々が協力し、資金を集め、ウクライナ人をサポート。**
**剣道修練の心構えを体現**
**「剣道を正しく真剣に学び　心身を錬磨して旺盛なる気力を養い　剣道の特性を通じて礼節をとうとび　信義を重んじ誠を尽して　常に自己の修養に努め**
**以って国家社会を愛して　広く人類の平和繁栄に　寄与せんとするものである」**

2022/06/29 19:00（公開） 2022/06/29 19:00（更新）

## なぜ戦争中のウクライナ剣士たちは国際大会に参加できたのか　ヨーロッパの国境を越えた“剣道の理念”

佐藤まり子

**「ウクライナの剣士たちにとって大会参加は『希望』の1つだった」**

3年に一度開催される「世界剣道選手権大会」の開催年を除き毎年開催されており、今回は31回目。コロナ後初の開催だったため例年より参加国は減少したが、ヨーロッパ・アフリカ地域32カ国から剣士が集まり剣を交えた。

この大会に、戦争中のウクライナからも参加があった。各国に散らばった選手たちの旅費や防具を集めたのは、パリ在住のEvgeny Andreev氏（以下エブゲニイ氏）だ。大会開催の約3カ月前からクラウドファンディングで協力を呼びかけ、最終的に1万1936ユーロ（約168万7675円）を調達。ウクライナに住む男性選手の一部の参加はかなわなかったが、9人の選手（ジュニア1人、男性3人、女性5人）が参加した。

https://nlab.itmedia.co.jp/cont/articles/3338656/



# 剣道が持つ文化としての魅力

**海外生活を通して感じた、剣道が持つ重層的な価値**

https://ideasforgood.jp/2025/07/22/aizome-kendogi-culture/

**藍染剣道着の文化と、剣道の教育的価値について野川染織工業の野川雄気氏、いばらき少年剣友会指導者の雨谷水紀氏にインタビューを実施。Webマガジン IDEAS FOR GOODに記事を執筆**



**雨谷氏**「紐を自分で結ぶという、ほんの小さな成長でも子どもは本当に変わります。そして、そうした小さな所作こそが、すごく大事な教育だと思うのです。結び目を丁寧に、しっかり縛る。それだけで『今日もがんばろう』と思えるんですよ」

「結ぶ」「整える」という行為は、日本人にとっては何気ないことかもしれない。しかし、それらが持つ静かな美しさや所作の流れは、外の国の人々から「美しい」「儀式のようだ」と評価されることがある。それは、スイッチのように人の心を切り替え、姿勢や表情にも影響するのではないだろうか。

**野川氏**「“結ぶ文化”自体は剣道だけに限ったことではありませんが、武道を学ぶ中で出会える面白さの一つですよね。『結ぶ』『畳む』……それらの日常の所作に、どれだけ気と胆力を込めたか。その過程の中にこそ、“人の強さ”が織り込まれていくのではないでしょうか」

## 不便さ、非効率が包含する価値

**雨谷氏**「私は時々、保護者の方に『道着と袴だけでもいいので、自分で洗わせてあげてください』と伝えています。私自身、かつて武州一の藍染の袴をお風呂場で踏み洗いしていました。道着も袴も、手洗いすると、藍が落ちてお風呂場が青く染まるんですよ。すると親に叱られたり、一緒に掃除したり……そういうことも大切な教育になると思うんです。

しかも、綿でできた剣道着は乾きにくい。天候や時間によっては洗濯が間に合わないこともあるし、少し匂いが残ることもあるかもしれない。でも、そうした不便さや不完全さも含めて、『これが剣道なんだ』と感じることも、時には大事だと思うんです」

社会がどんどん便利になる今のような時代だからこそ、あえて少しの不便さを残すことに意味があるのかもしれない。便利さ自体は悪いことではないが、至れり尽くせりのサービスや環境だけでは、感情の揺れ幅や、心が動く経験が少なくなってしまう。

**雨谷氏**「生きていると、物事は簡単に進まないことの方が多いです。すぐに答えが出ない状況を、自分で感じ、考え、受け止める……そうした日々の積み重ねが、きっと自分自身を整える力につながっていくのではないでしょうか。

それは『濡れたままでいいから着て、稽古しなさい』と無理に求めるのは違うと思っています。でも、子ども自身が『このまま乾かさなかったらどうなるんだろう』とか『濡れていて嫌だな』と感じ、自分で考えてみること。そのプロセスこそが大事なのです。そうした経験の中で、忍耐力や自分なりの工夫が育まれていくのではないでしょうか」



# スポーツハラスメントの原因と対策

「足を継ぐから」という理由で、防具で守られていない子どもの足を、指導者が 15分近く叩き続けていた場面を目撃したことから付けたタイトル

#スポーツ #体罰

/20 17:00

# 竹刀で子どもを叩き続けるのは「愛のムチ」なのか…スポーツが「暴力の温床」になってしまう根本原因

保護者すら「強くなるためには体罰も必要」と容認してしまう

PRESIDENT Online

佐藤 まり子 +フォロー
ライター

1 2 3 4 5 次ページ

スポーツの現場で暴力やハラスメントがなくならないのはなぜなのか。専門家は「スポーツハラスメントを容認しているのは指導者が多いというイメージを持つ人が多いかもしれないが、実際はそうではない」と指摘する。ライターの佐藤まり子さんが取材した――。

https://president.jp/articles/-/89251

**大阪体育大学スポーツ科学部の土屋裕睦教授（スポーツ心理学 / 教士七段）に、なぜスポハラが起こるのか、子ども・親・指導者自身にどのような悪影響を及ぼすのか、解決策について取材。**
**プレジデントオンラインに記事を執筆。**



## 武道だからといって暴力は許されない

日本スポーツ協会（JSPO）の調査によると、暴言や暴力、ハラスメント、差別などの不適切な行為の相談は年々増加し、昨年度485件と過去最高を更新した。被害の内訳は小学生42%、中学生12%、高校生が13%と、約7割が未成年という状況だ。

明らかに不適切だとわかる暴力行為より、判断するのがより難しい暴言やハラスメントに関する相談が多くなっているという。

## 「スポーツ史上最大の危機」から10年

2013年は、大阪市立高校で起きたバスケ部顧問の暴力による部員の自死、柔道女子ナショナルチームにおける暴力問題、部活動やスポーツ少年団での指導者の暴力問題が露呈するなど、スポーツ界における暴力・体罰が社会的に大きな注目を集めた年だった。

下村博文・元文部科学大臣は「スポーツ指導における暴力根絶へ向けて」と題したメッセージを発信し「今般の事態を日本のスポーツ史上最大の危機」と表現、「スポーツは、スポーツ基本法にうたわれているとおり、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神の涵養などのために行われるものであり、世界共通の人類の文化であって、暴力とは相いれません」と強調した。

2013年4月25日には「スポーツにおける暴力行為根絶宣言」がなされている。しかし、10年の時を経ても暴力・暴言・ハラスメントなど不適切行為は後を絶たない。

## 「愛のムチ」は「無知」の表れでしかない

スポーツにおける不適切な行為は、「動機」「正当化」「機会」が揃うことで発生しやすくなり、一つでも防ぐことができれば、不適切な行為の発生を抑えられる可能性が高まるという。

参照：日本スポーツ協会「NO！スポハラ」

「動機」は「勝たせたい」「勝ちたい」「勝たせなければならない」といったもので、昨今社会問題にもなっている「勝利至上主義」だ。私自身が保護者に言われた「大会に出られなくなる」といった言葉も、大なり小なりここに結びついていると思う。

これに関しては「なぜ勝利を求めるのか」をいま一度、立ち止まって考えてほしい。子どもたちが努力をして、全国大会に出たり、勝利を手にするのは本当に素晴らしいことだと思う。本人の自信にもつながるし、人生すら好転させてくれるかもしれない。

しかし、暴力や暴言で苦しい思いをしている子どもの姿に目を瞑ってまで、得たいものだろうか？　そもそもスポーツや武道を、何のために習わせているのだろう？

「正当化」は行為者自身の過去の経験からの正当化、もしくは不適切な行為だと認識していないことを指す。体罰や暴言がある環境で生き残ったという成功体験や、その指導方法しか知らないがために、「体罰や暴言で子どもが成長する」という考えを持つ人がいる。



大阪体育大学剣道部では土屋教授が中心となって「人間力養成セミナー」を開催し、学生と一緒にスポハラ根絶のための勉強会を行っている。「気合を入れるためのビンタ」「打ち抜けを早くするためにお尻を叩く」などを材料に、なぜ剣道指導ではそのようなことが行われるようになったのか、メリット・デメリットを考え、スポハラにつながる可能性があれば、代替案はないか学年を超えて話し合う。スポハラの根絶だけではなく、剣士として人間力を高め、ともにグッドコーチを目指すことをねらいとしているという。

## 海外から評価が高い日本人の礼儀正しさ

筆者は2017年から5年ほどオランダに在住した。その頃は教育移住がブームで、オランダの教育を求めて移住を決意する家族も多かったように思う。しかし、長くオランダに住む日本人家族からは「初等教育はやはり日本がいい」との声をよく聞いた。

オランダ人の友人からは「日本の子どもたちは、きちんと整列して先生の話を聞くよね。すごいと思う」と言われたことがある。この礼儀正しさは剣道だけではなく日本のスポーツ全体に共通しているようにも思う。

## 本来、スポーツは人生を豊かにするもの

2024年7月にイタリアで開催された世界剣道選手権大会には61カ国が参加。漫画やアニメの影響、日本文化への興味から軽い気持ちで始めたものの、その奥深さや日本人の精神性に触れ、どっぷりとハマってしまったという声もよく聞く。最近では子どもの頃から剣道を習う海外剣士も増え、長期の休みを利用して、わざわざ防具を持って日本に出稽古にくる。

ハンガリーの少年剣士たちを連れて、日本に出稽古の旅にきた指導者

剣道には「師弟同行」という言葉があって、指導者と教え子が一体となって修行を続けていく文化がある。師弟だけではなく、子がきっかけで剣道をはじめた保護者も「自分自身も成長できた」ということがある。剣道に限らず、武道やスポーツは何歳になっても人は成長できると教えてくれて、人生を豊かにしてくれる。

他国からもその精神性が評価されている日本の運動文化を、より高めて未来に渡すためにも、スポハラについて真剣に考えるときなのではないだろうか。